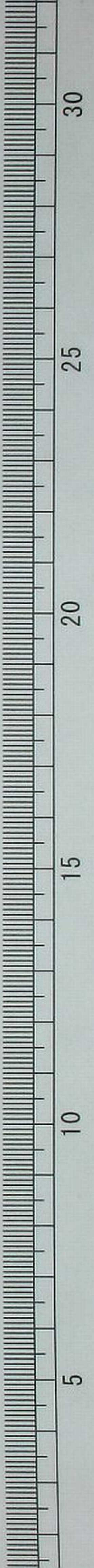


遭厄日本紀事

四

113
584
4



門 4 13  
584  
卷 4

遭厄日本紀事卷之上

天正十五年二月  
花房仙太郎氏寄贈

杉田豫盈釋

高橋景保校

箱館牢内之變

○ 市牢内より氣絶し移くは己子田里窓の  
方を見しは外子人可重と稱し近く来れと云  
予窓を去りしは極子の者より小き候之を我より又  
手招し之人の見さ難き早く食正候に候と  
され我より鬼と云ふ人との重市世頃と云ふ  
食事なく且食し訓是之難く是は候と云ふ

いと古き等々志は出さく直に喫く厚く謝せし  
彼人志を兄と存居れ振子と重く後部の  
如幾れを占くと納くをれ思ふに容赦なき  
下後の方を對北の道は振子と異國を憐れ  
申願ふは己も罪を犯すを精を犯すを  
慰めんとするの志實に心は徹く感するは  
○ 程なく食相を盛る措を物来ししと少  
由食せし夜は入るは又是夜は来しと  
社く或は腰を扱て或は後歩しと進出人事を  
のみ工吏と世軍の造る力と兄と云ふは天作

廣きと尺四寸ありと太き枚末を以て振子と云ふ  
其中程は入口と戸あり是は大お程をおろし  
外構との出入城と免多し軍舎の壁は忘るあり  
何れもたさ木を以て振子と云ふ内は紙を以て  
障子城あり其圍は一その窓を以て僅式尺  
許を隔るある向の垣のみ見へ又一の窓は  
南面より此の窓を圍免る外柵を城く山裡  
濠系及津路の一端日本地の海を海ても見へ  
入口と本戸の傍は一小舎あり即廁前下を板鋪  
より中央より深き第何れ是を其使を建てる

与重又一箇の木より造りこし疵子何れをすましく  
僅中走し一竹外隔り置之に牧敷りとの  
その他凡そ何れとのか

○ 浦のく半内の子をい何れ小箇の小刀多ふ  
何れ一の時多ふ是ら生しと容易なる意の子紙  
一破里梅く出屋く度陰に梅されを外構并に  
控をも多紙走し一先と何れより小刀の何れんや  
誰か市子与力せん破云は急なく逃れ出るとも市人  
し何れより何れ者し幸に海を日と見小舟を  
得く東風は梅く蕪艸の地は是生るとも此小

残を返回厄の流き尚解く標免らる屋く如何  
控の憂幾りより存ん或る教書せり書んらと  
思へ此企は思ふ多くそ急し握の如く指夾  
と多し

○ 夜子入る遅く旅忌と蒲ふと破掃来りてそ  
蒲室を焚くはれも夜忌を古く汚く臭く其  
あれハ陽を投げたるをす又後夜半時毎人  
構の外を本を踏しと廻り

始免回本の中人を唯本を踏人のこと思ひ  
一小行の本をす打合せり時刻を告げらる

構の形を以てて飛車を戒むるなり

又據の内は居る事(を)其時(に)揚を思(は)す  
予(は)所(を)査(査)す

○ 曉の頃あまも静まりしは不斗俄に形は  
くお徳子存の耳は介(は)る事(を)其(の)意(を)測(測)る  
性(性)き(き)し(し)く(く)す(す)モ(モ)ル(ル)ト(ト)シ(シ)カ(カ)ヨ(ヨ)フ(フ)ト(ト)の(の)語(語)も(も)  
お(お)も(も)不(不)言(言)は(は)俄(俄)に(に)語(語)を(を)守(守)り(り)て(て)何(何)と(と)心(心)疑(疑)し  
く(く)是(是)を(を)予(予)と(と)も(も)河(河)を(を)同(同)じ(じ)の(の)位(位)に(に)同(同)じ(じ)事(事)  
内(内)は(は)あ(あ)れ(れ)も(も)又(又)波(波)を(を)あ(あ)ら(ら)む(む)を(を)懸(懸)念(念)持(持)付(付)内(内)事(事)も  
少(少)ら(ら)ん(ん)と(と)思(思)は(は)る(る)事(事)と(と)心(心)疑(疑)す(す)

又予の内謀を波お告す一回は逃げ去る處を折し

あ(あ)ら(ら)ん(ん)と(と)が(が)し(し)心(心)を(を)折(折)る(る)を(を)右(右)あ(あ)ら(ら)の(の)語(語)も

モ(モ)ー(ー)ル(ル)ヲ(ヲ)夢(夢)又(又)西(西)ル(ル)平(平)尼(尼)ル(ル) アルパン トウイナ 河(河)は(は)廣(廣)き(き)色(色)あり

地(地)か(か)の(の)事(事)を(を)見(見)し(し)カ(カ)ヨ(ヨ)ウ(ウ)は(は)波(波)を(を)守(守)り(り)て(て)波(波)お(お)又

予(予)は(は)復(復)は(は)居(居)る(る)に(に)波(波)を(を)守(守)り(り)て(て)思(思)は(は)る(る)事(事)と(と)心(心)疑(疑)す(す)

若(若)し(し)心(心)を(を)揚(揚)る(る)を(を)何(何)重(重)む(む)の(の)為(為)は(は)高(高)貴(貴)を(を)や(や)り(り)出

さ(さ)ん(ん)と(と)是(是)を(を)思(思)は(は)る(る)事(事)と(と)心(心)疑(疑)す(す)事(事)と(と)心(心)疑(疑)す(す)事(事)と(と)心(心)疑(疑)す(す)

卒(卒)の(の)事(事)人(人)未(未)記(記)或(或)来(来)を(を)其(其)の(の)為(為)を(を)あ(あ)り(り)又(又)予(予)は(は)

顔(顔)洗(洗)毛(毛)に(に)漱(漱)せ(せ)ん(ん)と(と)水(水)と(と)湯(湯)と(と)を(を)持(持)来(来)れ(れ)り(り)予(予)顔

洗(洗)毛(毛)に(に)漱(漱)せ(せ)る(る)と(と)入(入)口(口)の(の)戸(戸)を(を)花(花)を(を)委(委)せ(せ)り(り)予(予)顔

ききと申すは予を愛し多量に食を給飯と  
持来せしと申す未だ食を分り建は是を食せし  
○登りしは予をく字の取後とお同しき日本人  
船頭通事と醫師と並にアレキセイと横濱を  
来りし

後、予ハ船頭通事ハ上京然以即と云ふ事  
五十歳作ある醫師を東江と云ふ  
彼ハ椅子の外に坐し云ふは若し不快なるを  
此醫師ハ御多量に是を供するの由を云ハ  
先人として松島に引寄せて居り者なりと

彼不之は談話せしる予竊にアレキセイの語  
ヘレブニマフをシイモノフ マカロフ 及び  
アレキセイと予は如く獨居しを志す事九ハ  
其く暗く且寂しき多量の中を睡する又居り  
昼食を持来くると是を食せしけを其  
入口に戸と扉を何ら窓も無く食を予例は  
予を出せしと予を問せしと予を告ぐ  
食を氣を分けは是を食せしと

○為る春の頃復年の取後然以即とアレキセイと我  
伴ひ来りしと予は云ふは此地の長官の洗

の解を符烟を有らん固く妙文の中深う好  
免多者を一人例は居り一免を名を若庵と  
弔思ふや今例の如く惠給は居り人好む人ハ  
ミールとヘレフニコフと云ふ人も所人と云く只  
誰かともいふと云ふ一と云ふを名を若く  
庵一是を長友の事ありと云ふは此のハ順  
次は交代せしむ庵一先マカロフをいふは順  
云一は即時はマカロフ御達を来れり弔アレキセイ  
故に日本人は云は免一ハマカロフ弔の弟は来れ  
るワシリコフ故ミールの方は云ふ云ふと云ふ乞一ハ

そ事ハ修きれと云へる中より日本人の事云ふ  
出ー事あるミールの事水史と云ふを修き  
と弔は於て疑へり弔此アレキセイ御達を来れり  
彼人を宰の取彼を云ふと思ふは世時アレキセイは  
修きり世人の此地の長友は次高重を彼命は  
故治免と云ふ事弔アレキセイといふ我等をいふ  
清く初く林と獄と云ふ言一はやうく何れも  
曰居せ一免返すハ中國の海に云く一と  
之より弔又その内居する事あるは在るやと云一  
よ否と云ふ修著此の如きもの上云ふは元日本人の

一言半句より心を留め先深く察しをく慮るとの  
事なく若く波紋人程なく同底を造りてなると云  
却く疑も是れ中世とも尚きをしと差してより  
そる者の事ある事と察し心中がハハ樂を生  
せし

○世日本人等出立進取及平利引の方を被り  
是れ等々新法より平ら顔を見つた此れを定しを  
山形思ひたるも如く見え実の極景をへレブニコフ  
ワシリエフアレキセイ等の居る所は此れを以て誠極樂  
ありといひる事此志の語り同底の流の居る所を

大なる枚末より造るる縁を以て入口ハ起りて出入  
是れく日光も足らぬ時を以て入りて是れ縁に  
里

○日本商人の言とマカロフの作戦ありて皆同く消  
殺し兼録し是れより以来始りて今又ガ  
食事をとるを重んじて此れを食料の道申す事一  
しをハハとる事あり

我等兼録し是れを始の源を食料の道申す事  
大抵版と昔雜草類を甚だ合する汁と煮る  
る事此れ版の昔雜草類二行を以て事なり



又稀<sup>ま</sup>豆の粉と腐<sup>く</sup>る<sup>る</sup>粉と輕<sup>く</sup>代<sup>り</sup>糊<sup>の</sup>如<sup>く</sup>  
くは煮<sup>く</sup>る<sup>る</sup>成<sup>る</sup>之<sup>を</sup>或<sup>は</sup>葛<sup>を</sup>湯<sup>に</sup>汁<sup>の</sup>代<sup>り</sup>粉<sup>を</sup>  
を<sup>ま</sup>す<sup>る</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>家<sup>敷</sup>在<sup>る</sup>五<sup>十</sup>日<sup>の</sup>多<sup>く</sup>  
星<sup>躰</sup>の<sup>ま</sup>ら<sup>る</sup>は<sup>切</sup>る<sup>る</sup>を<sup>お</sup>か<sup>し</sup>め<sup>る</sup>者<sup>も</sup>  
唯<sup>二</sup>夜<sup>一</sup>の<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>て<sup>毎</sup>日<sup>之</sup>の<sup>食</sup>も  
之<sup>朝</sup>ハ<sup>五</sup>時<sup>迄</sup>七<sup>時</sup>迄<sup>ハ</sup>飯<sup>を</sup>飲<sup>む</sup>湯<sup>を</sup>  
又<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>砂</sup>粒<sup>を</sup>入<sup>る</sup>る<sup>麻</sup>葉<sup>を</sup>出<sup>せ</sup>り  
夜<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>丸<sup>餅</sup>枕<sup>二</sup>を<sup>持</sup>来<sup>り</sup>是<sup>を</sup>市<sup>綿</sup>の<sup>袋</sup>林<sup>の</sup>  
の<sup>葉</sup>を<sup>入</sup>る<sup>る</sup>物<sup>あり</sup>

如<sup>く</sup>の<sup>如</sup>く<sup>の</sup>袋<sup>敷</sup>の<sup>袋</sup>所<sup>は</sup>出<sup>る</sup>事<sup>一</sup>

○ 葦八月十日<sup>廿七日</sup>の朝<sup>更</sup>多<sup>く</sup>熊<sup>匠</sup>来<sup>り</sup>今<sup>日</sup>  
竹<sup>地</sup>の<sup>も</sup>ち<sup>友</sup>傳<sup>草</sup>と<sup>雨</sup>層<sup>と</sup>人<sup>と</sup>生<sup>園</sup>と<sup>空</sup>は<sup>後</sup>所<sup>は</sup>  
あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>己<sup>は</sup>そ<sup>時</sup>刻<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>我<sup>等</sup>と  
牢<sup>も</sup>出<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>傳<sup>を</sup>傳<sup>を</sup>傳<sup>を</sup>傳<sup>を</sup>傳<sup>を</sup>傳<sup>を</sup>  
日<sup>中</sup>人<sup>一</sup>人<sup>毎</sup>は<sup>執</sup>る<sup>る</sup>我<sup>等</sup>と<sup>列</sup>に<sup>ま</sup>ら<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>先<sup>に</sup>  
逢<sup>申</sup>古<sup>傳</sup>の<sup>來</sup>を<sup>一</sup>人<sup>指</sup>を<sup>一</sup>て<sup>波</sup>是<sup>の</sup>用<sup>を</sup>  
成<sup>る</sup>る<sup>る</sup>む<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>長<sup>を</sup>一<sup>さ</sup>く<sup>る</sup>用<sup>を</sup>  
潤<sup>く</sup>傳<sup>は</sup>二<sup>人</sup>白<sup>髪</sup>の<sup>老</sup>人<sup>ハ</sup>帝<sup>の</sup>相<sup>繼</sup>を<sup>さ</sup>り  
多<sup>く</sup>大<sup>を</sup>傳<sup>の</sup>先<sup>は</sup>少<sup>なる</sup>葉<sup>竹</sup>の<sup>如</sup>き<sup>介</sup>の<sup>対</sup>  
多<sup>く</sup>和<sup>保</sup>梅<sup>は</sup>澹<sup>城</sup>持<sup>も</sup>て<sup>先</sup>に<sup>ま</sup>ら<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>わ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>一</sup>



吊糸よりモールを右側まで延ばし煙管と調料  
吸殻付く 椅子は脚車より先まで延ばす人の  
外へも延ばすことあり

○此所を待と良久一を考と其五子種のお流  
すらるるを待つるにハフニラの居る半とマカロフ  
張る一如くあると又モールの居る半を吊る居る  
所と等しく定むるに其の流すの景をいへる  
と好しと云

○此所より九を待余を待し係ある家を甲必  
舟エウオリンと云ふ

日本人の吊るるをエウオリンと云ふ

即ち吊る付る流る二人の同心吊る流る大前を  
る義也より其處をいへる 廣き合は入ると又二人の  
同心よりいへる 吊るるをエウオリンと云ふ 天井は高く  
床は高く唯心を敷きく 張るにキルル 床は少座の如く  
蓋しお妙あり  
又此より一方は地を二人物より高く床をいへる  
巧み流るるを敷きく 敷きくは幅員は十寸あるに  
八尺許りあり 懸るは流るは画きする襖をいへる 地の  
と隙を赤をいへる 流るは流るは木の椅子は流る  
をいへる 硝子紙用の流るを敷きく 流るは流るの

上右方の罫の言さす大斗の組は緘鐵鍵挿通を不  
 種との刑具の意用を設けざる事此所見  
 早し時を携行の事と見ても同元の注に於て之  
 名ひつらぬ事書を敷ける中其は長友社を設け  
 書紙及び人前紙と硯を置く事長友の右側は  
 以て及社又と名を怪異故に人々各々其の  
 尺俵を隔てて着せし〜列を以てして日本流の  
 悪義を被り〜と據り、鑑を常しく左側は各々  
 刀をさしけし床の前の事此は〜事社を設けし  
 者之力は〜床を西子の態に即し麻の上右の端

下左を設けざる事

市旗文字ある同心等を石の上は社を〜見人と  
 下長友何れは是れ命〜すを長友の命とす  
 先多を〜後をモールも同じ地紙は書す右側は  
 是又へレビニヨヲ書すモールの傍に之ある事  
史を記し人法  
入事と皆すは

此は長友アレキセイ書す  
ヘレニヨウの右側の居る事

都く日本人有る事とす〜右の字は  
 下と其は心紙用と見〜河所より〜然るを  
 長友は日本人有る事と見〜縁故ハ〜下福を  
 左を〜と〜と〜と〜と

○右の如く彦彦とて通事被書示し之と其日  
阿多志ハ世所ハ長友ありと云被書被示し礼を  
ありと被書示し礼をありと被書示し礼を  
出し予は宣讀初ハ先予ハ友佐姓名本玉を向く  
予是ハ彦彦とありと云被書示し礼を  
此を

予ハ姓名を問ふゆハアレキセイト被書示し  
汝ハ姓名何と云尾書也と問了尾と云詞  
彼ハ強と云予ハ甲申の外余被示し  
何の事と云と解らさず的アレキセイ被書示し

けくはアレキセイと云然し  
為りハアレキセイと云尾書を予是ハ彦  
姓を問ふゆハアレキセイと云被書示し  
余ハ毎々世所ありと云之を解は  
しハ被書示し

次ハモールのヘレブニウ及水又ハありと云被書示し  
予ハ被書示し  
始ハ先ハ彦彦と云被書示し  
又ハ彦彦と云被書示し  
被書示し





此際けく、その方より着書の方の原形を携へるとモ  
 ーールの半を一所より取らぬと云ふ事とモール  
 と云ふ相見も事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 出んと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 予モールは此の時より予の情も、カコトは勿く云  
 如くせり、モールも又予は云ふ事と云ふ事と云  
 コトは云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 の事、故の時、予は彼の第一の故人、梅田清右衛門  
 我等も、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云  
 一、予等も、予は清右衛門と云ふ事と云ふ事と云

一、予の情も、予は清右衛門と云ふ事と云ふ事と云  
 内、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 予は、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 情も、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 情の如く、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云  
 予は、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

モール、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云ふ事と  
 予は、梅田清右衛門と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

○ 初稿等を各箱綴の原形を携へ、故に十八日を  
 終りしと、再び此の如き事と云ふ事と云ふ事と云











○昔八月廿五日 横濱を田舎船より同船を引き  
来りし一舟の乗客ある者ありて皆紙幣を盗取りて  
予何れをゆいんと怪しむ。四人の男ありて予ら  
船中所持の杖とモール及ヘレニコフの洋銃等を  
撥正来りしを予證しし。予強と云る者ありて  
めし予見し終り受けぬ。此等の不何れの日  
中人にありて今我れにテイマナを奪ひしを  
予或るテイマナ日本紙を来りし紙幣と怪しむ。  
彼者此の不ありし證しぬ。所持ありしと知し因て  
予おあしむ。テイマナのクナリを其紙の紙に舟に

○此等の物を海客は盗りて去りしを予見しし。予思ひ初  
て其徳也。又テイマナ紙幣ありし由紙幣を我ら  
男の上より取りて我ら此の紙幣は其盗人し。と  
おもひし。更しは恐歎也。  
○右の如く我等の船に來りし者ありて我ら不  
審んえし。此の衣服と由紙幣ありし者ありし。是を  
リエルト云ふ。予予我等の船に來りし者ありし。予  
送る。其の者ありし。日本紙幣ありし。我ら予に  
し。かゝるは其等の者ありし。予予予予。リエルト  
實りしを感也。

○予日布地ありしより以来のものとて日清の  
記は古きものと思ふに故書より歟し不系相  
とひけり一種異本数印をみるに又衣摺の  
糸を纏うるを該ひて下しと云ふありて  
緯の神を白き糸を元と該ひて我々の意は  
阿の一軍の記と一物清の思ふ糸を抽く  
該ひ不係はか因しその印と又糸を纏うる  
所にて只珠と一と思ふやハ衣の裏の縁の糸を  
ひくると云ふの類あり

○此日一人の家卒来りて高モ一は昔に汝等と  
をやくしは我が録に居る類と云ふ予考す  
はたは阿て物なく歩程は居る類と云ふ何と  
おれは昔は日清人をして我々の外國とせよと  
辨へしる程衣を送るは是録中の推しの所  
このは衣を穿ては我々の衣の字は金と云ふ程  
くを周囲は折し敷く所の金銭も且又年内の  
事柄を改定する事あり此は極く見  
家時より古くは所は古く事あり

○第八月廿八日 我七月 廿二日 再ひ我が録の底付は海峽を  
再定箱録の底付は海峽を







日本の属地を認めざる物と商買の物と  
係終形友家の物と此を以て主物と云ふ  
係は其る者も此を

一 之れがせしめなく故に日本の主物と云ふは  
乃ち之れがせしめなく日本の物と換免れし  
利均と一旦判つたの日本は彼と一と  
以後は日本と係終形との交りある事を  
知るを日本人の終形は係終形の官商の  
為る事なりと云ひ計りし事なり  
之れは之れがせしめなく故に日本の主物と云ふ

さるる愚昧の事なるべし

一 家伝紙及法書を焼掃し彼ら果ては  
所あり

一 之れは之れがせしめなく二人の日本は  
故に之れがせしめなく故に之れがせしめなく  
之れは之れがせしめなく故に之れがせしめなく

一 日本より書きたるものオホーツカ  
一 之れは之れがせしめなく故に之れがせしめなく  
ハ如何と云ふ事オホーツカは之れがせしめなく  
之れは之れがせしめなく故に之れがせしめなく

一 被殺村に於ては、其時其初を  
出せしと云ふ故に尋ねるに、今此等あり

○ さきく日本人被殺村に於ては、若者の名を四ひし、ホーシ  
トフ及カウイフと云ふべし、此を言ふに、野田村に於て  
トフ、カウイフ、ハニコラー、サント、エツ、及びカウリ、ロイ、ワツと  
稱する者、同人の名をいふと、予も被殺村に實に被殺  
しく、其時、其姓を言ふに、野田村に於ては、ホー  
シトフは、捕られし二人の者の名をいふと、予も被殺村に  
とあり、其時、被殺村に於ては、野田村に於ては、  
と云ふ、以て、野田村に於ては、ホーシトフ、其時、  
と云ふ、

と云ふ、ホーシトフ及ダイドフと云ふ名あり  
と云ふ、ホーシトフハ、波系ハ、有る者、飛と  
して、日本人ハ、此等、種々の名を、此等  
ハ、其時、野田村に於ては、日本  
ハ、被殺村に於ては、野田村に於ては、  
と云ふ、野田村に於ては、野田村に於ては、  
と云ふ、野田村に於ては、野田村に於ては、  
ニコライ、サンドレ、エツとホーシトフと云ふ、  
此等、野田村に於ては、野田村に於ては、

○ 又、野田村に於ては、野田村に於ては、野田村に於ては、

後才ホーツカ 保接 忍かくハカムシヤ ッカの誤カ 子西を居て俄  
蘇州の宿目と重然となく刻々く再  
然正事とあるハ如何の事か 未だ就  
不著しくその中の次第をくは  
ちきまつては 平家なるは彼ら舟子と  
その事を秘せし カムシヤツカ の宿目  
臨し無幾あるハ 又ハ彼ら 属下は  
官命ありと疑ふあり 何をい  
彼ら思慮あり歟 和歌ありと日本  
是を許し 尚存約せしめて ホー  
ニトフ の

船と云ふハ カハシヤツカ 一紙は 在りある者ある  
其れ又 ニトフ 居合せし宿目ハ 和歌あり  
和歌あり 又ハ 和歌 の 帝邸に 入テ  
ウリスの 傳言との 函箱を 又ハ 和歌 日本  
海路に 未だ 宿目 和歌 ホーニトフ の 未だ 宿目  
和歌を 未だ 宿目 和歌 又ハ 和歌 日本  
我等ハ ニトフ ヲ ニト ヘテ ル ス フル 是ハ 未だ 彼ら  
日本は 彼ら 和歌 宿目 和歌 宿目  
和歌 宿目 和歌 宿目 和歌 宿目 和歌  
宿目 和歌 宿目 和歌 宿目 和歌 宿目  
宿目 和歌 宿目 和歌 宿目 和歌 宿目  
宿目 和歌 宿目 和歌 宿目 和歌 宿目



船のこことへテルスフル子方星一時其船より  
物をだカムニヤツカ止る所迄は他船より  
無甚利加子船と問ふも同一と  
思ふんべし

○予熱考あるも日本人古きに云々或る所  
アと名ぬ何とあるホーシトフの日記地より  
北村をいふ、條形圍境ハ勿論香く此路已  
浙中ノ古き所なりと云ふ所ありしは其國  
の條形より他邦と雖も交るる事なく此の  
他邦の人其境を侵る日本國境は拘りし事と

し子孫ありし事半を修する事あり  
能く彼ホーシトフの日本より花を採集し  
人氏を條形よりいふは我々の詳し其謝  
と名ぬ所の如く又その事ありし事あり  
能くハ列子謝し語西河ありを不悖と云ふ者半  
リ本其境の僅二三の村居る南船の跡も採集  
せし所の昔く此路色の人詳し其事あり  
きやあをいふ人其を北村より條形北官家  
の事に出るは北村を云せし事あり其  
ありし日本人事其事ありし事あり

さすとも今く是を實と爲す振子とあるを  
只此の居るべきと雖も應るは日中人と  
性力氣根強くは故を問毎は是を二  
之を居るべきと誤りて海を往くを  
を考へ更し我を是を海に我等の  
丁寧な後し海をのりて少時餘り  
時を費ししがは此の時を止す  
中より此の事を更し海に何れ  
去りや海上より何れ預けられ  
や船を出しは定むる時何れや  
事ある事なし

て是事より別よりあるは火の  
振探をせしむるは彼を  
而をば此の術は

○此日と暮るは及海に  
應は出く保身は  
鱈を出く食及は  
と喫し砂糖を加し  
好幾食と去る和  
す

遭厄日本紀事卷之三上畢

早稲田大学図書館

011688998834